

奏  
で  
て

上  
野  
詩  
織

【あらすじ】

音楽の神様は存在するのか。  
それは、自分が作り出した幻想なのか。

7歳でショパンを弾きこなすほど、ピアノの才能に恵まれた鳴宮蓮司（7）。しかし母・風沙（34）は、自閉症の兄・奏（10）につきっきりで、蓮司は常に孤独を抱えていた。蓮司にとって、ピアノだけが唯一のより所だったのだ。

18年後。コンサートホールで、何千人もの観客に迎えられて登場したのは、奏（28）だった。成長した奏は世界的ピアニストとして活躍していたのだ。

一方、蓮司（25）はピアノを辞め、一般企業に勤めていた。仕事終わり、夜な夜な街頭ピアノで演奏する蓮司。その演奏は誰にも気に留められることはない。唯一の観客であるホームレスに、蓮司は自嘲気味に語る。

「兄は世界的ピアニストだけど、自分で髭を剃ることもできないんですよ」

ある日、風沙が倒れて入院する。これまで母親任せだった奏の世話を蓮司は引き受けることに。奏は日々の生活に強いこだわりがあり、蓮司は振り回される。そんな蓮司をサポートしたいと、ゲイの恋人・井岡須直（27）が奏の世話を手伝ってくれることに。人懐く優しい須直に、心を開いていく奏。須直は、奏が毎日カセットプレイヤーで何かを聴いていることに気付く。

須直のサポートもあり、奏と蓮司の距離はゆっくりと縮まる。共に過ごす時間が増えて、少しずつ兄弟らしくなっていく。

そんな中風沙の容態が悪くなり、兄弟は病室に呼び出される。風沙から、ピアノを続けなかつたことを後悔してるかと聞かれる蓮司。「あなたのピアノは、人生の苦しみや心の痛

み、そして救いを感じる。それは人を感動させる」と凧沙は優しく語り、息を引き取った。

凧沙が亡くなってから、奏はピアノが一切弾けなくなる。病院に連れていくが、体の不調はない。すると須直が、奏がいつも聞いているカセットプレイヤーを蓮司に渡す。

「奏くんは、蓮司の背中をずっと追いかけていたんだよ」と須直。蓮司が再生すると、幼い蓮司が弾いている『英雄ポロネーズ』が録音されていた。

兄は音楽の神様に愛され、自分は愛されなかった。そう言い訳にして、音楽から逃げた蓮司。しかしこの時、奏が自分の背中を追っていたことを知ったのだ。

奏がもう一度ピアノを弾けるように。そう願いを込めて、蓮司は18年ぶりにステージに立ち、『英雄ポロネーズ』を演奏する。蓮司の演奏を聞いた瞬間、奏は席を立ち、舞台に近付いていく。誰も止める者はいない。奏は、再びピアノが弾けるようになった。

二年后。コンサートホールで、蓮司と奏は連弾で共にステージに立った。

ずっと通じ合えないと思っていた兄。しかしこの瞬間、蓮司は初めて奏と心を通わせることができたのであった。

【登場人物】

鳴宮蓮司なるみやれんじ（7 / 25 / 27）弟・会社員

鳴宮奏かなで（10 / 28 / 30）兄・ピアニスト

鳴宮凧沙なぎさ（34 / 52）兄弟の母親

井岡須直すなお（27 / 29）蓮司の恋人

宮沢昌也（59）兄弟のピアノの先生

松崎梨花（24）蓮司の同僚

前園健次（45）ゲイバー店主

江藤大志（31）演奏会主催者

会社の同僚 / 観客 / コンサートスタッフ / 他

○鳴宮家・リビング

一台のピアノ。

鳴宮蓮司（7）は、指を器用に動かしながらショパンの『英雄ポロネーズ』を弾いている。

力強さと喜びを感じる、蓮司の演奏。

鳴宮奏（10）は隣に座って、蓮司の手の動きに合わせて振動する鍵盤に触れている。

鍵盤が上下する度に、はしゃぐ奏。

鳴宮凧沙（34）は、そんな子ども達を優しく見守っている。

○コンサートホール・舞台と客席（夜）

T「18年後」

舞台の上。

オーケストラの楽団員と指揮者が待機している。

タキシード姿の奏（28）が、舞台袖から登場する。

会場からは割れんばかりの拍手。

奏、椅子に座る。

しかし奏はすぐに立ち上がり、舞台袖へ戻って行く。

再び舞台に現れて、椅子に座る奏。

また立ち上がり、舞台袖へ戻って行く。

演奏はなかなか始まらない。

会場からは笑い声が聞こえてくる。

凧沙「……」

客席では、凧沙（52）が心配そうに舞台を見つめている。

凧沙が手に持ったパンフレットには、

『演奏前に、出たり入ったりを4と5度繰り返します。これは鳴宮奏の演奏時のマイルールです』

と、注意書きがある。

再び舞台に現れた奏。

奏は椅子に座ると、正面を向く。

演奏が始まる合図だ。

奏「……（息を吸う）」

奏、一瞬祈るように天井を見上げると、鍵盤に指をそつと落とす。奏の音が響いた。会場の空気が、一瞬で変わる。ラフマニノフ『ピアノ協奏曲第二番』。奏の厳かなピアノ独奏が始まる。

風沙「……」

風沙、ほっとしたように座席にもたれかかる。

風沙M「大丈夫……あとは奏の音に、身を任せるだけ」

目を閉じ、音楽を味わう風沙。

風沙の隣の席は、空席だ。

### ○居酒屋

蓮司（25）は退屈そうに、机の上で片指の一本一本を上げては下げてを繰り返している。

蓮司はスーツ姿だ。

指の動きが早くなつていく蓮司。

隣から「ねえ」と女の声がする。

女1「蓮司くん」

蓮司「え？」

蓮司が顔を上げると、男女数名の視線が集まっている。

コンパの最中だったのだ。

女1「それ何？ 指の体操？」

蓮司「ああ、癖みたいなもの」

女1「指柔らかいんだね。私がやると、ほら」

女1が同じ指の動きをする。

薬指と小指が一緒に上がっている。

ね？と微笑む女1。

身体の距離を詰めてくる女1に対し、

蓮司はゆっくり体を離す。

男1「蓮司、女性陣がいるのに自分の世界に入るの禁止」

男2「ごめんね、空気読まないのこいつ」

女1「蓮司くん、こういう場嫌い？」

女2「実は彼女がいるとか？」

男1「ないない。こいつ、そういうの面倒臭

がるタイプだから」

女1「蓮司くんに聞いてるんだけど」

男性1「きつつー」

男女の笑い声。

蓮司、机に置いた携帯が通知で光っているのに気付く。

蓮司が携帯を見ると、凧沙から着信が残っていた。

### ○居酒屋・外

酔っ払った男女メンバーが、連絡先を交換し合っている。

女1「蓮司くんは？」

蓮司の姿はない。

### ○コンサートホール・舞台

奏はピアノの前に立つと、ぎこちなくお辞儀する。

総立ちで拍手を送る観客。

指揮者に促されながら、舞台袖へ戻って行く奏。

拍手は鳴り止まない。

再びステージに現れ、椅子に座る奏。

奏「……（深呼吸）」

奏、椅子から身体を浮かせると、体重を乗せて力強い第一音を鳴らす。

ショパンの『英雄ポロネーズ』だ。

会場奥まで響き渡る、奏の音色。

曲が進むにつれて、奏の表情は歓喜へと変化していく。

### ○路上

蓮司、使い古された街頭ピアノの前に立っている。

蓮司「……」

椅子にゆっくり座ると、蓮司は奏と同じように『英雄ポロネーズ』を弾き始める。

曲が進むにつれて、蓮司の表情は苦痛に歪んでいく。

通行人たちは、蓮司の演奏に気を留めることなく通り過ぎて行く。

○コンサートホール・舞台

奏が弾き終えると、再び会場に大歓声  
が沸き起こる。

奏「……」

奏は立ち上がろうとせず、夢見るような表情で座っている。

○路上

蓮司、曲を弾き終え、顔を上げる。

ホームレスの男性が蓮司の前に立ち、  
小さく拍手をくれた。

蓮司「……」

恥ずかしそうに頭を下げる蓮司。

男性、手に持ったビニール袋から何か  
を取り出そうとする。

蓮司「あ、お金は別に」

男性は袋からワンカップを取り出して、  
蓮司に渡す。

蓮司「どうも……」

○コンサートホール・控え室

凧沙、奏の手をマツサージしている。

扉を叩く音。

凧沙「どうぞ」

宮沢昌也（59）が入ってくる。

凧沙「宮沢先生、来てくださってたんですか。

奏、先生よ。覚えてる？」

奏「宮沢先生、ピアノの先生、です」

凧沙「そう。昔お世話になったわね」

奏「はい、そうです」

宮沢は笑う。

宮沢「先生と言っても、奏君はあつという間に  
僕の手を離れていきましたけどね。今日の  
演奏も素晴らしかったです」

凧沙「先生にそう言ってもらえると、奏も喜  
びます」

宮沢「今日、蓮司君は？」



風沙の手が止まる。

風沙「チケットは送ったんですけどね」

宮沢「そうですか」

風沙「あの子も忙しいみたいで」

宮沢「ピアノはまだ？」

風沙「いえ」

奏、マッサージが止まったことが不満でバタバタと暴れる。

風沙「はいはい、ちゃんと続きやるから」

宮沢「お忙しいところ失礼しました。またね、奏君」

奏「はい、またどうぞ」

風沙「(笑って)どこでそんな言葉覚えたのよ」

宮沢「では」

宮沢、部屋から出て行く。

### ○路上

蓮司、ホームレス男性と並び、一緒にワンカップを飲んでいる。

蓮司「うちの兄は、世界的に有名なピアニストなんですよ。小さい頃は『神童』と呼ばれたこともあつて」

男性「……」

男性、黙って酒を飲んでいる。

聞いているような、いないような。

蓮司「ショパン、ベートーヴェン、モーツァルト、ラフマニノフ、リスト。どんな難曲も、兄は遊び感覚で弾きこなしてしまふ」

男性「……」

蓮司「……でも、兄はひとりで髭を剃ることも出来ないんです」

### ○鳴宮家・洗面所(朝)

風沙、カミソリで奏の髭を剃っている。

奏は英雄ポロネーズを口ずさんでいる。

風沙「その曲好き？」

奏は答えず、ただ口ずさむだけ。

風沙、それを見て笑う。

風沙「蓮司、今日も来なかつたわね。元気にしてくれていたら良いんだ……けど……」

凧沙、突然痛そうに心臓を抑えながら、床に倒れる。

凧沙の手からカミソリが落ちる。

視界から凧沙が消えて、奏はきよろきよろと母の姿を探す。

凧沙が倒れていることに気付く奏。

奏は凧沙を起こそうと、凧沙の腕を強く引っ張る。

奏「あああ」

凧沙はぐったりして動かない。

奏は落ち着きが無くなっていく。

奏「あああああ」

パニックになる奏。

洗面所をぐるぐる歩き回ったかと思うと、奏は叫びながら飛び出して行く。

○病院・廊下

スーツ姿の蓮司が駆けつける。

警察官と、顔の右半分だけ髭を剃り残した奏がいた。

奏はソファに座り、イヤフォンでカセットプレイヤーを聴いている。

警察官「家の外で、奏さんがパニックになられているのを見た近所の方が、通報されまして」

蓮司「そうですか……」

警察官「我々が駆けつけて、凧沙さんが倒れているのを発見しました。今は意識も戻って安静にされています」

蓮司「ありがとうございます」

蓮司、頭を下げる。

顔を上げる時、ちらと奏を見る蓮司。

○同・病室

凧沙は点滴をつけて、ベッドに横たわっている。

蓮司が入って来ると、凧沙の目がすこしだけ動く。

意識はあるようだ。

凧沙「蓮司」

蓮司「いいよ、無理して喋らなくて」

蓮司、鞆から着替えの服や生活用品を取り出して棚に置く。

蓮司「無事で良かった」

凧沙「……私が倒れたら、外に出ようねって」

蓮司「え？」

凧沙「奏とね、何度も何度も一緒に練習したのよ」

蓮司「……」

凧沙「奏、ちゃんと出来たのね」

凧沙、嬉しそうに目を細める。

蓮司「いいから寝てなよ」

凧沙「少しの間、あの子をよろしくね」

蓮司「……分かってる」

凧沙「ありがとう」

凧沙、喋って疲れたのか、ゆっくりと目を閉じる。

凧沙の寝息が聞こえてくる。

蓮司は音を立てないように、静かに病室を後にする。

○同・廊下

蓮司が出てくると、奏の姿がない。

蓮司「兄さん？」

蓮司、周囲を見渡す。

奥から、奏の笑い声が聞こえてくる。

○同・待合室

蓮司がやって来ると、患者に交じってテレビを観ている奏がいた。

画面ではニュース番組が流れている。

男性キャスターの顔がおかしいのか、

男性が映る度に、奏は「あはははは」

と笑いだす。

蓮司「兄さん。行くよ」

奏、待合室の時計を見て、また画面に視線を戻す。

奏「……10、9、8」

蓮司「え？」

奏「7、6」

奏、テレビに近付くと、チャンネルを変えろ。

困惑する他の患者たち。

奏「――3、2、1」

陽気な音楽と共に、通販番組が始まる。

司会者「テレビの前の皆さんこんばんは。『通販ですよ』のお時間です。本日も」

奏「ほんじつも、なまほうそうで、たくさんのしようひんを、ごしようかい、していきます！」

奏、司会者と同じ台詞を喋っている。

蓮司「ほら、行くぞ！」

蓮司、奏を立たせようとするが、奏はテコでも動かない。

蓮司、諦めて病室へ戻って行く。

○同・病室

眠る風沙を見つめる蓮司。

蓮司「母さんはこんな時まで奏の心配をするけどさ。奏は、母さんが倒れた事すら認識してないよ」

風沙「……」

何も語らない、風沙の寝顔。

○電車・車内

蓮司、奏の腕を掴んでいる。

奏は落ち着きがなく、蓮司の手をすり抜けて車内を歩き回る。

蓮司「兄さん！」

蓮司、後を追う。

奏はひとりの乗客に近付くと、携帯を取り上げる。

白い携帯だ。

乗客「ちよつと、何なんですか」

蓮司「すみません！」

蓮司は慌てて奏から携帯を取り返し、乗客に返す。

蓮司「兄は白い物が好きで乗客「？」」

○蓮司のアパート・リビング

蓮司に手を引かれて、入ってくる奏。

部屋の隅には、埃をかぶったピアノが置かれている。

蓮司「兄さんはしばらくここで俺と一緒に暮らす。分かった？」

奏「知らない部屋、住めません」

蓮司「(苛々と) 住むんだよ」

奏「ピアノ、弾けますか」

蓮司「ああ。しばらく使ってないけど、調律はしてある」

奏「ピアノが弾ける部屋は、住めます」

○同・洗面所(夜)

蓮司、奏の剃り残した顔半分を、剃ってやっている。

洗面台には、歯ブラシが2本。

青色と白色だ。

奏、白色の歯ブラシを手に取る。

蓮司「あ、ちよい待ち」

蓮司、奏から白い歯ブラシを取り上げ、新品の歯ブラシを渡す。

蓮司「兄さんはこの歯ブラシ。青と白は使っ

ちや駄目」

奏「白、使いたいです」

蓮司「これは人の物だから」

奏「人のものは、駄目」

蓮司「そう」

奏「白使いたい、でも駄目」

蓮司「そう！」

蓮司、奏の顔についたクリームを洗い流し、タオルで拭いてやる。

タオルを持って出て行く蓮司。

奏「……」

奏、白い歯ブラシを取り、口に入れる。

○同・リビング

蓮司、布団をひいている。

寝間着の奏、蓮司をじっと見ている。

蓮司「兄さんはここで寝て」

奏「いやです」

奏、出て行く。

蓮司「ちよつと！」

蓮司、奏を追いかける。

○同・寝室

奏、蓮司のベッドで気持ち良さそうに眠っている。

ベッド横の台には、カセットプレイヤーが置かれている。

○同・リビング

蓮司、敷き布団で寝ている。

蓮司「……（不服そう）」

蓮司、寝返りをうつ。

× × ×

時計は午前3時。

真つ暗な部屋から、蓮司の寝息が聞こえる。

ドアが開き、奏が入って来る。

奏は部屋を歩き回り、ピアノを見つけると、鍵盤のふたを開ける。

奏、音階練習を始める。

ドレミファソラシド。

ドシラソファミレド。

ドレミファソラシド……。

蓮司「なんだ！？」

蓮司は飛び起きると、ピアノを弾いている奏に気付く。

蓮司「何時だと思ってるんだよ！」

奏「今日、練習は、まだです」

蓮司、奏のもとへ行き、強引にピアノから引き離そうとする。

奏は強い力で抵抗しながら、ピアノを弾き続ける。

蓮司「……ああもう、好きにしろ！」

蓮司は諦めて布団に潜り込むと、布団を頭まですっぽり被る。

○同・台所（朝）

蓮司、眠そうにパンを食べている。  
奏は、食パンに隙間なくジャムを塗っ  
ている。

特に疲れた様子はない。

蓮司「……」

恨めしそうに奏を見つめる蓮司。

○都内のビル・会議室くオフィス

奏、会議室でひとり、楽譜をぶつぶつ  
と読んでいる。

物珍しそうな目で、外から見守ってい  
る同僚たち。

蓮司、皆の前に立ち、

蓮司「お手伝いさんが見つかるまで、会社に  
兄を連れて来ることになりました。ご迷惑

をおかけしますが、よろしく願います」

同僚1「鳴宮奏がお兄さん？ 世界的ピアニ

ストの？」

蓮司「はい」

同僚2「何で言わないんだよ、初耳だぞ」

同僚1「あとでサインもらうか」

盛り上がる同僚たち。

醒めた表情の蓮司。

会議室の中にある奏は、外野を気にす  
ることなく、楽譜読みに没頭している。

○同・蓮司の席

蓮司、パソコンで文章を打ち込みなが  
ら、電話対応している。

蓮司「一番早い掲載日ですと、火曜の16時

締切で翌日反映となり……」

会議室から奏が現れて、出口に向かっ  
て歩いて行く。

一瞬、固まる蓮司。

蓮司「……あ、すみません。もう一度お願い  
します」

自動ドアが開き、奏が出て行く。

蓮司「あ！（と叫ぶ）……いや、すみません。  
ちよつと、後で折り返します」

蓮司、電話を切ると「兄さん！」と叫

んで後を追いかけていく。

○同・食堂

うどん、お茶碗に入ったご飯、白菜サ  
ラダをお盆に載せてやって来る蓮司。

蓮司「腹が減った時は、俺に言えばいいから。  
勝手に逃亡しないで」

奏「いただきます」

手を合わせ、箸を持つ奏。

蓮司はノートパソコンで仕事を始める。

奏「……」

奏、箸を置く。

奏「食べないですか」

蓮司「俺？ 俺は仕事もあるし。もともと昼

は抜くこともあって……」

奏「蓮司食べない、僕も食べません」

蓮司「……そうきたか」

蓮司、ご飯を食べ始める。

蓮司「うまい」

奏「うまいですか」

蓮司「うん、うまい」

奏、うどんを食べ始める。

松崎梨花（24）が通りかかる。

梨花「めずらし、鳴宮君がお昼食べてる」

蓮司「半ば強制的にな」

梨花は奏の隣に腰掛けると、奏のご飯  
をじつと見る。

梨花「全体的に白くない？」

蓮司「兄は偏食だね。基本白っぽいものしか  
食べない」

梨花「そんな人いるんだ」

梨花は、机に置かれた分厚いノートに  
気付く。

『奏・取り扱いノート』。

梨花「何これ？」

蓮司「母から預かった、兄のトリセツ」

梨花「こんなのあるんだ」

梨花はノートを手に取り、ぺらぺらめ  
くる。細かいルールがびっしり。

梨花「これ全部覚えるの？ 大変……」



蓮司「別に、大変じゃない」

梨花「そうなの？」

蓮司「そのノート作ったの、俺だから」

梨花、驚いた表情。

蓮司「実家を出る時、お手伝いさん用に作ったんだ。まあ結局、奏が嫌がって誰も続かなかったけど」

梨花「そうなんだ……」

梨花、奏のほうを向く。

梨花「奏さん、ピアノストなんだよね。ピアノ弾く人の指ってこんななんだ」

梨花は奏の指に触れようとする。

突然、奏は机を叩いて、「ああああああ」と癩癩を起こす。

梨花「え、なんかしちやった？」

蓮司「初対面の人に触れられるのが嫌いなんだよ。大丈夫、すぐ落ち着くから」

梨花「……そっか、ごめん」

梨花、そそくさといなくなる。

梨花が消えると、けろっと元に戻る奏。奏はうどんを食べ始める。

蓮司「……切り替え早いな」

○同・廊下

蓮司、携帯で電話している。

蓮司「ええ、明日からお願いできればと……

はい、お願いします」

通話を切る蓮司。

画面には、須直という人物から『今日家行っている？』とメッセージが。

蓮司「……」

蓮司、『しばらく無理』と返信する。

○楽器レンタルスペース（夜）

個室がたくさんあり、色々な楽器の音が聞こえてくる。

奏、個室でピアノの練習をしている。

外まで音が漏れるくらい、奏のピアノは大きく響く。

個室の外では、蓮司がソファに座り、

パソコンで仕事をしている。  
蓮司は眠そうに船を漕ぎ、何度も頭を  
上下させている。

○蓮司のアパート・玄関（朝）

お手伝いの女性（48）に、取り扱い  
ノートを渡す蓮司。

蓮司「兄は自分のルールに従って過ごそうと  
するので、怪我のないよう見守って下され  
ば大丈夫です」

お手伝い「分かりました」

蓮司「何かあれば携帯に連絡してください。  
あと、それから——」

背後から、奏がピアノを弾く音が聞こ  
えてくる。

お手伝い「お上手ですね」

蓮司「……ピアノは、必ず二時間おきに止め  
てください。1度言っただけでは聞かない  
と思うので、根気よくお願いします」

お手伝い「もし、止めなかったらどうなるん  
ですか？」

蓮司「24時間弾き続けますよ」

お手伝い「……」

蓮司「じゃあ、よろしくお願いします」

蓮司、出勤して行く。

○オフィス

蓮司、仕事をしている。

携帯が鳴る。画面に『お手伝いさん』。

蓮司は時計を確認する。

午後一時だ。

蓮司「……もったほうか」

蓮司、電話に出る。

電話越しに、ピアノが聞こえてくる。

蓮司「はい」

お手伝い「（電話）ごめんなさい。何をやって  
も演奏を止めてくれなくて」

× × ×

梨花「……」

梨花、ホワイトボードを見つめる。

『鳴宮 商談く直帰』と書かれている。  
梨花「一日社内って言ったのに」

○蓮司のアパート・リビング

ピアノを弾き続ける奏を、お手伝いさんと蓮司が見つめる。

お手伝い「すみません、かれこれ5時間近く弾き続けていて……」

蓮司「二人がかりでいきましょう。せーの」

蓮司が背中、お手伝いさんが腰まわりを押さえ、奏をピアノから引き離す。  
バタバタと抵抗する奏。

○同・玄関（夜）

チャイムが鳴る。

エプロンをつけた蓮司、玄関にやって来て、扉を開ける。

井岡須直（27）が立っていた。

蓮司「しばらく無理って言っただろ」

須直「……そのエプロン、もしかしてご飯作ってた？」

蓮司「悪いけど今日は帰って」

ピアノの音が聞こえてくる。

須直「……誰かいる？」

蓮司「今は都合悪いんだって」

須直「浮気？ 浮気だ！ 僕に隠れて男を連れ込んでるんだろ！」

蓮司「家の前で騒ぐなって」

須直「僕の話は遊びだったんだ……部屋に入れてくれないなら死んでやる！」

蓮司「つたくも……」

ぎゃーぎゃー騒ぐ須直を、蓮司は強引に部屋の中へ入れる。

○同・リビングく台所

向かい合って座る、須直と奏。

蓮司は台所で飲み物を用意している。

須直「蓮司そっくり！ かわいい！」

奏「……」

奏は、興味深そうに須直の顔を眺めて

いる。

急に笑い出す奏。

須直「お兄さん、笑い出したんだけど」

蓮司「ああ、それは多分」

蓮司、紅茶が入ったカップを人数分持ってくる。

蓮司「昔から、個性的な顔とか、変わった顔の人を見ると笑い出すんだよ」

須直「はい？」

蓮司「須直の顔、面白いじゃない？」

須直「僕がブサイクだって言いたい？ どう

なの奏君。僕がブサイクってこと？ ね

え？ ねえ？」

奏、笑い続けている。

蓮司も釣られて笑う。

須直「ちよつとちよつと！ 兄弟そろって失礼でしょ！」

#### ○同・寝室

眠った奏を、ドアの近くで眺めている蓮司と須直。

須直「楽しい人だね」

蓮司「気が合って良かったよ」

須直「今日泊まっていい？」

蓮司「別にいいけど、歯ブラシは買いに行っ

た方がいいよ」

須直「え？ なんで？」

蓮司「兄さんが須直の歯ブラシ、気に入って使ってるから」

須直「まだ1回しか使ってないのに……」

蓮司「一度使い出すと、納得するまで使い続けるから」

#### ○同・リビング

蓮司と須直、お酒を飲んでいる。

須直「蓮司と出会って2年になるけど、お兄

さんがいたなんて初耳なんですけど」

蓮司「まあ言っただけだったし」

須直「ちよつと寂しい」

蓮司、席を立つと、ピアノの前に座る。

須直「？」

蓮司はピアノのふたを開けると、モーツアルトの『きらきら星変奏曲』を弾き始める。

蓮司「俺、4歳でピアノを始めたんだ」

須直「うん」

蓮司「人より耳が良くて、一度聞くと大体は同じように弾くことが出来た。初めて耳で聞いて弾いたのがこのきらきら星変奏曲で」

蓮司、演奏を止める。

ショパンの『幻想即興曲』を弾く蓮司。

蓮司「7歳になるとショパンも弾けるようになった。毎日朝から晩まで夢中になって練習して。もちろん夢はピアニストだった」

須直「……」

蓮司「母はシングルマザーで、ひとりで俺たちを育ててくれた。でも、ほとんどの時間は兄につきつきり」

須直は席を立ち、蓮司のそばへ。

かまわず弾き続ける蓮司。

蓮司「俺は納得してた。兄は母なしでは生きていけないけど、俺は生きていける」

須直「うん」

蓮司「それに俺にはピアノがあった。それでいいと思った。……でもある日、一度もピアノを触ったことがない兄が、急に弾き始めたんだ」

蓮司は、途中で演奏を止める。

蓮司「兄は別格だった。俺の傍で毎日ピアノを聞いて、楽譜を見て、鍵盤に触れて。それでなんとなくショパンが弾けてしまった」

蓮司、ピアノのふたを閉める。

蓮司「俺は思った。兄はこれをするために生まれてきたんだだろうなって」

須直「……」

蓮司「それ以来、俺は兄の前では弾けなくなつた。母もピアノも手に入れた兄。交代したいって何度も思ったよ」

須直「……」

○オフィス（朝）

出社してくる蓮司。

梨花が声をかけてくる。

梨花「今日はお兄さん一緒じゃないの？」

蓮司「ああ。知り合いが見てくれてるから」

梨花「ふうん。知り合い、ね」

○蓮司のアパート・リビング

須直、パソコンで記事を書いている。

奏はピアノの前に座り、イヤフォンでカセットテープを聴いている。

聴いたままの状態で、革命ポロネーズを弾き始める奏。

× × ×

須直、ちらと時計を見る。

須直「奏くん、そろそろ休憩しよう」

奏、ピアノを止める気配がない。

須直「……そうだ」

須直、冷蔵庫からお菓子箱を取り出す。箱の中には美味しそうなシュークリームが3つ。

須直「蓮司と一緒に食べようと思ってたけど、仕方がないか」

須直、シュークリームをお皿に載せる

と、奏に近付く。

初めは気にしていない奏。

しかし次第に、ピアノからシュークリームに関心が移っていく。

須直「ふたりで食べた方が美味しいよ」

○同・台所

紅茶と一緒に、シュークリームを食べる奏と須直。

須直「奏君、おいしい？」

奏「おいしいです」

須直「このシュークリーム、蓮司のお気に入りなんだ。来る度を買ってくる」

須直の口には、クリームがついている。それを見て、笑い出す奏。

須直「また笑ってる！ やっぱ兄弟だね。蓮

司なんて初対面の時、お前は顔がうるさいって言ったんだよ？ 酷くない？」

奏「須直の顔、うるさいです」

須直「はいはい。変なフレーズは覚えなくていいです」

笑う奏を見て、須直も釣られて笑う。

須直「……子供の頃、蓮司ってどんな子だった？ 全然話してくれないから」

奏「蓮司ですか」

須直「うん。覚えていることでいいよ」

奏「守ってくれました、いつも」

○会社近くのコンビニ

蓮司、セルフレジで買い物をしている。後ろで、子どもが泣き喚く声が聞こえてくる。

蓮司が振り向くと、男の子（5）が地面に寝転び、痲癩を起こしている。

母親は、苦しそうに見守っている。

蓮司「……」

そこに老齢の女性が近付いてきて、親子に声をかける。

老婦「ちよつと、あなた母親でしょ。泣いてるじゃないの」

母親「すみません、この子今パニックを起こしています……」

老婦「こんなに泣いてるのに、どうして放っておけるの？ 可哀想じゃないの！ ねえ、ぼく、大丈夫？」

老婦、男の子に触れる。

男の子はさらにパニックになり、声が大きくなる。戸惑う老婦。

蓮司「あの、すみません」

老婦「？」

蓮司「パニックを起こしている時に、本人に話しかけないであげてください。余計にパニックになってしまっんです」

老婦「……どういうこと？」

蓮司「落ち着くまで待つてあげてください。こうなると、お母さんもただ見守ることし

かできないんです」  
老婦「……そうなの」

老婦、そそくさと行ってしまふ。

蓮司「大丈夫ですか」

母親「すみません、ありがとうございます……」

蓮司は袋から、購入したお菓子を取り出し、男の子に差し出す。

蓮司「あげるよ」

男の子「……」

男の子の関心はお菓子へと移り、パンツクがおさまる。

蓮司「僕の兄と似てたので」

母親「……」

頭を下げる母親。

しかし母親が顔を上げると、蓮司はいなくなっていた。

○蓮司のアパート・リビング（夜）

帰宅する蓮司。

ソファには、肩をくっつけて眠っている奏と須直がいた。

蓮司、近くにあったタオルケットを

二人に掛ける。

× × ×

服を着替えた蓮司、家から出て行く。

ドアの開閉音に目を覚ました奏、起き上がる。

○道（夜）

歩いて行く蓮司。

その後ろを、ついて行く奏。

○ゲイバー

カラオケで安室奈美恵を歌っている店員がいる、狭くて騒がしいバー。

蓮司、入って来る。

蓮司がカウンターへ行くと、前園健次（45）が声をかける。

前園「蓮司くん、お久じやないのお！」



蓮司「どうも。ママ、席空いてる？ 空いてなければ改めるけど」

前園「何言ってるんよ。もちろん空いてるに決まってるじゃない。ていうか蓮司くんが言うなら空けるじゃない」

前園、目の前で飲んでいる客二人のグラスをさっと奪い取り、かわりにイッキ飲みする。

客1「ちよつとママ、あたしの酒！」

前園「あんたたち安酒で長居し過ぎなのよ。」

今日はさっさとおうち帰んなさい」

客2「ひどくい、厳しいんだから」

二人、席を蓮司に譲ると、店から出て行く。

前園「はい蓮司くん、どうぞ」

蓮司「なんか強引だったけど……」

前園「いいのいいの、あの子たち常連だから」  
蓮司「じゃあ、お邪魔して（と座る）」

前園、おしぼりを渡す。

前園「最近全然お店来てくれないから、あたしもう寂しくて寂しくて、毎日手が震えたわよ」

横から「それは更年期障害！」と茶茶を入れる声が聞こえる。

前園「あんた達うるさいわよ！ 蓮司くん、

もしかして彼氏できた？」

蓮司「察しの通りで」

前園「やだ、冗談だったのに！ 失恋じゃないのお！ ショックで明日坊主にしちゃおうかしら」

客1の声「ママ、ちよつと」

前園、扉の方を振り返る。

前園「なに、あんたたち帰ったんじゃないの？」

客2「店の外に……」

前園・蓮司「？」

奏が、中へ入ってくる。

蓮司「……」

前園「まさか蓮司くんのボーイフレンド？」

蓮司「……兄です」

前園「え？」

○同・ラウンジ

蓮司と奏、ボックス席に座っている。

両隣には、前園とボーイがひとり。

前園「最近入った子なのよ。さつきへタクソな安室奈美恵歌ってたでしょ」

ボーイ「歌舞伎町の安室奈美恵です。奈美恵

って呼んでください」

蓮司「なんでもありっすね」

奈美恵「奈美恵、お酒つくりまーす」

奈美恵がお酒を作るのを、じっと眺めている奏。

前園「不思議ね、兄弟なのに随分と雰囲気違うわ」

奈美恵、お酒が入ったグラスを三人の前に置いていく。

蓮司「あ、すみません。兄にはノンアルの飲み物をもらえますか？ 白っぽいと助かるんですけど」

前園「ちよっと奈美恵、先にお客さんに確認

しておきなさいよ」

奈美恵「ごめんなさい」

奏「……」

奈美恵が下げようとする前に、グラスを取り、一気に飲み干す奏。

固まる一同。

蓮司「兄さん、大丈夫か？」

奏、一瞬真顔になり、今度は蓮司のグラスを手に取り、飲み干す。

前園「意外と飲める口なんじゃない」

蓮司「飲み過ぎだっけ」

奏、しゃっくりが止まらなくなる。

× × ×  
奏、奈美恵とともにカラオケを歌っている。

知らない曲のようで、言葉も音程もでたらめだ。

奈美恵「(奏に)ちよっとあんた、音外してるわよ。しっかり歌いなさいよ」

奏、無表情だが楽しそうに見える。

蓮司と前園、カウンターでそんな二人を眺めている。

前園「あたし、ひとりっこなのよね」

蓮司「そうなんだ」

前園「だから兄弟って羨ましい」

蓮司「……」

前園、蓮司にもたれかかる。

前園「蓮司くん、彼氏ができたなら、お兄さ

んに乗り換えちゃおっかな」

蓮司「ママ、冗談は顔だけにして」

前園「突然の毒舌！」

賑やかな笑い声と、歌声とともに、夜が更けていく。

○コンサートホール・ロビー

会場に人が集まってくる。

ドレスアップした者、家族連れ、カップル……。

皆、顔は上気してている。

これから始まる演奏会に、胸の高鳴りが抑えられないといった様子。

『鳴宮奏 日本公演 2022』

『本日のプログラム』

ドビュッシー「子どもの領分」

須直の声「子どもの領分？」

○同・控え室

奏、イヤフォンでまたカセットテープを聴いている。

須直と蓮司もいる。

蓮司「そう。ドビュッシーが愛娘エマのために作った、小さくて美しい6つの楽曲」

蓮司、奏を見やる。

蓮司「空想的で、あどけなくて、兄にぴったりの作品だよ」

須直「楽しみ」

須直、奏に近寄る。

須直「奏くん、いつも何聴いてるの？」

奏「お守りです」

須直「お守り？」  
奏「はい」

○同・大ホール・舞台く観客席

ほぼ満席の観客席。

蓮司と須直は、後列の席に並んで座っている。

須直「お兄さんの演奏を見るのは久しぶり？」

蓮司「ああ、実家を出てからしばらく観てなかったから」

須直「楽しみだね」

蓮司「……」

舞台には、一台のピアノ。

奏が登場すると、会場から割れんばかりの拍手が鳴り響く。

奏はまた何度か、舞台袖に戻って現れてを繰り返す、納得したところで着席する。

蓮司「……」

奏「……（深呼吸）」

奏の演奏が始まる。

会場内を、風が通り抜ける。

音の粒が跳ねる。

奏はピアノと一体化して、まるでピアノに操られるように演奏している。

蓮司M「奏のピアノは、音楽の神様に愛されているのがよく分かる。あまりにも無垢で、神々しくて……人を夢中にさせる」

蓮司、須直を見る。

音に合わせて体を揺らしながら、楽しんでる須直。

蓮司「……」

蓮司はさらに、客席を見渡す。

皆、演奏に合わせて体を動かしている。まるで自然と身体が動いてしまう、といったように。

○同・ロビー

休憩時間、スタンドテーブルでコーヒーを飲んでいる蓮司と須直。

周りの客達は興奮しながら、感想を言い合っている。

パンフレットを確認する須直。

須直「次はショパンの……ピアノ・ソナタ第3番短調か」

蓮司「作曲当時、病気がちなショパンが、父の死や自身の結核、恋人との不和の中で書き上げた孤独な作品だよ」

須直「へえ、素敵」

蓮司「ちよっとトイレ」

○同・トイレの前

蓮司が出てくると、「蓮司君」と男性の声が出た。

蓮司が振り返ると、宮沢が立っている。

蓮司「宮沢先生」

宮沢「もう蓮司君なんて年でもないか」

蓮司「ご無沙汰してます」

宮沢「10年以上ぶりかな。また会えて嬉しいよ」

蓮司「先生もお元気そうで」

宮沢「いやあ、最近はピアノを弾いても手もたつくようになってね。奏君のドビュッシー、素晴らしかった」

蓮司「ええ、ありがとうございます」

宮沢「ピアノはもう辞めたって聞いたけど、本当？」

蓮司「……はい」

宮沢「……」

宮沢、少し考えて。

宮沢「これはまあ、僕の戯言だと思って聞いてくれたらいいんだけど」

蓮司「はい？」

宮沢「君は昔、とても良いピアノを弾いた。豊かな表現力と繊細なピアノの音が素晴らしかった。どうして弾くのを辞めたの？」

蓮司「それは」

宮沢「奏君がいるから？」

蓮司「……しよせん、その程度の気持ちだっただってことです。兄のような神童は超えら

れない」

宮沢「……僕は、蓮司君が弾くショパンが好きだったよ。とても苦しそうでね」

蓮司「え？」

宮沢「ショパンが描く孤独や情念、怒り、そして悲哀。人間の複雑な心情は、神様には表現できない。苦しんだ者だけ」

蓮司「……」

背後から「パパ！」と呼び掛けられる

宮沢。

宮沢の妻子が待っていた。

宮沢「じゃあね。次の演奏も楽しんで」

蓮司「はい」

宮沢、家族と共に去って行く。

○同・大ホール

奏、ショパンを演奏している。

演奏を聞きながら、無意識に指を動かしている蓮司。

○蓮司のアパート（夜）

蓮司、須直、奏が帰宅する。

奏は服も着替えずに、ソファに倒れ込み、眠ってしまう。

須直「（笑って）電池の切れた子どもみたい」

蓮司「あのさ」

須直「うん？」

蓮司「少しだけ奏を見ててくれないかな」

須直「なに、夜遊び？」

蓮司「ま、そんなところ」

須直、蓮司の顔をじっと見る。

須直「いいよ、いってらっしゃい」

蓮司「うん、いってきます」

○路上（夜）

蓮司は街頭ピアノの前へ行くと、ゆっくり椅子に座る。

ショパンの『英雄ポロネーズ』を演奏する蓮司。

ピアノの音色と共に、過去の記憶を辿

っていく蓮司。

○鳴宮家・リビング（回想・18年前）

蓮司、ショパンの『英雄ポロネーズ』を弾いている。

奏は寝転びながら、楽譜を見ている。

楽譜は『英雄ポロネーズ』だ。

凧沙は洗濯物をたたんでいる。

凧沙「奏、楽譜読めるの？」

奏「はい、読めます」

奏、口ずさむ。

凧沙「（笑って）蓮司のピアノに合わせて歌ってるのね」

扇風機の風で、楽譜がペラペラとめくれている。

奏「ああああああ」

パニックになる奏。

蓮司はピアノを中断し、奏を振り返る。

凧沙が慌てて楽譜のページを元に戻し、奏を落ち着かせている。

凧沙「大丈夫、大丈夫よ」

奏「……」

蓮司、二人をじっと見つめるが、またピアノに向き直る。

凧沙「びっくりしたね、奏」

母に抱かれて、平穏を取り戻す奏。

弾き続ける蓮司。

× × ×

窓の外は日が暮れている。

まだ練習している蓮司。

凧沙が紅茶とケーキをお盆にのせて部屋に入ってくる。

凧沙「あんまり根詰めちゃだめよ」

蓮司「うん」

凧沙「蓮司は本当にピアノが好きね」

蓮司「うん……好き」

○路上（現在）

蓮司、何かを振り切るように、激しく鍵盤を叩く。

通り過ぎようとしていた通行人たちが、立ち止まる。

○鳴宮家・リビング（回想・18年前）

ソファで眠ってしまった蓮司。  
ピアノの音が聞こえてきて、ゆっくりと目を開ける。

目の前で、奏が『英雄ポロネーズ』を弾いている。

それはデタラメな演奏。

蓮司「……」

蓮司、自分の両腕を触る。

鳥肌が立っていた。

凧沙が、音を聞きつけてやって来る。

ピアノを弾いている奏を見て、凧沙は腰を抜かし、床に座り込む。

凧沙「神様……ああ神様」

蓮司「……」

凧沙「ありがとうございます。ありがとうございます。ぎいます」

凧沙は、ぼろぼろと涙を流す。

凧沙「あの子に……奏に、ピアノの才能を与えてくれて」

蓮司「……」

蓮司の表情が無くなっていく。

○路上（現在）

弾き終えた蓮司は、立ち上がることなく座っている。

通行人たちは、動かない蓮司を見て、離れていく。

蓮司「……」

蓮司が顔を上げると、前と同じ男性がワンカップを持って立っていた。

蓮司、少し笑う。

× × ×

男性とワンカップを飲む蓮司。

蓮司「言い訳ばかりしました。兄には叶わない、兄は音楽の神様に愛されて、自分はそのではないって」



男性「……」  
蓮司「でも、音楽を手放したのは自分自身だったんです。……音楽の神様なんて、本当はいないのに」

○病院・病室

窓に打ち付ける雨。

凧沙の顔はむくみ、一方で体は痩せている。

ベッドのそばに立つ蓮司。

奏は椅子に座り、楽譜に夢中だ。

凧沙「忙しいのありがとう。奏の公演会は順調？」

蓮司「ああ、大丈夫」

凧沙「……良かった」

凧沙、嬉しそうに笑う。

凧沙「ねえ、蓮司」

蓮司「なに？」

凧沙「ピアノはもう弾かないの？」

蓮司「……」

凧沙「子供の頃、朝から晩までずっと練習してたでしょう。……でも、奏が弾き始めた途端、家では弾かなくなってる」

蓮司「うん」

凧沙「ピアノを辞めたこと、後悔してない？」

蓮司「……してないよ」

凧沙「そう」

蓮司「うん」

凧沙は笑う。

蓮司も、笑い返す。

凧沙「ずっとそれだけが気掛かりだったから」

蓮司「ならもう気にしなくていい」

凧沙「……」

凧沙、蓮司を見つめる。

凧沙「ねえ蓮司」

蓮司「なに？」

凧沙「自分の心に、どうか正直に生きてね。」

たった一度きりの、あなたの大切な人生なんだから」

蓮司「……」

凧沙「そうだ、最後に1つだけ、お願い聞いてくれる？」

蓮司「なに？」

凧沙「私が死んだら、蓮司にショパンの『舟歌』を弾いて欲しいの」

蓮司「……わかったよ」

凧沙「蓮司」

蓮司「うん」

凧沙「あなたのピアノはね、人生の苦しみや、心の痛み、そして救いを感じるの。それはきっと人を感動させる」

蓮司「……」

凧沙「約束よ。弾かないと成仏しないから」

蓮司「(笑って) なんだよそれ」

○病院・全景(夕方)

雨が激しさを増していく。

窓から蓮司の後ろ姿が見える。

その背中が、雨の雫で歪んで見える。

○同・待合室(夜)

奏、ショッピンング番組を見ている。

テレビに合わせて司会者の言葉をぶつぶつと呟いている。

蓮司が現れる。

蓮司「兄さん」

奏、テレビに夢中で、振り返らない。

蓮司「母さんが亡くなった」

奏「……」

蓮司は奏の隣に腰掛けて、溜息をつく。  
蓮司「……どうせ兄さんは、分かってないだろうけどね」

○葬儀ホール・告別式会場

親戚や知人が集まっている。

少人数の小さな告別式。

喪主席に座る蓮司と、その隣で落ち着きなく体を揺らす奏。

お坊さんが木魚を叩き、お経を読み始めると、奏はブハッと吹き出す。

奏「あははは」

笑いが止まらない奏。

蓮司、須直に目配せする。

須直が頷く。

須直「奏君、外行こっか」

奏を外に連れ出す須直。

蓮司、遺影の母親を見つめる。

### ○同・庭園

風が気持ちいい。

奏は、植えられた花や草木に夢中だ。

蓮司と須直、並んで立っている。

須直「奏くんの明るさに救われる」

蓮司「母親が亡くなったこと、理解していな

いんだよ」

須直「……そんな言い方やめなよ」

蓮司「母さんは自分の全てを捧げて、兄さん

の人生を生きてきたんだ。そうしなかった

俺の分まで」

須直「うん」

蓮司「もっと、自分の人生を生きれば良かったの

たのについて思うよ」

須直「きつとお母さんが、望んだことだよ」

蓮司「どうだろうな」

### ○路上（深夜）

誰もいない、真夜中の街。

母親の遺影を持って現れる蓮司。

蓮司は、ピアノの上に遺影を置く。

蓮司「……」

蓮司は、ショパンの『舟歌』を弾き始

める。

静かな夜に、蓮司のショパンの音色が

優しく響いていく。

### ○蓮司のアパート・寝室（深夜→朝）

ベッドに横たわる奏。

奏「……」

目は開いている。

× × ×

目覚まし時計が鳴り続けている。

蓮司がやって来て、目覚ましを止める。

蓮司「兄さん起きて」

奏「……」

奏は動かない。

蓮司「？」

蓮司、奏の顔を覗き込む。

奏での目は開いている。

蓮司「なんだ、起きてるじゃん」

奏「……」

○同・玄関

蓮司を見送る須直。

須直「お兄さん起きない？」

蓮司「ああ。目は覚めてるけど、ベッドから起きようとしなない」

須直「一日、様子見てみるね」

蓮司「ありがとう」

須直「行ってらっしゃい」

蓮司「行ってきます」

蓮司、出て行く。

○同・リビング

ソファで横になっている奏。

須直、パンケーキをお皿に載せてやって来る。

須直「奏君、朝ごはん」

奏「……」

須直「食べないなら僕が食べるよ」

奏、むっくりと起き上がり、義務的にパンケーキを口にほおぼる。

一口、二口食べると、奏はまたソファに横になる。

須直「……」

須直、ピアノのふたを開ける。

一音、鳴らす。

須直「今日は弾かないの？」

奏「……」

奏、まったく動かない。

○病院・待合室

須直、電話で蓮司と話している。

須直「うん、体はとくに問題ないみたいなんだけど……」

奏、ぼんやりと宙を見つめている。

抜け殻のようだ。

心配そうに見つめる須直。

須直「ピアノを全く触ろうとしない」

○電車・車内

並んで座る、須直と奏。

須直、奏が離れないように腕を組んでいるが、奏は抵抗もせず、ぐったりしている。

須直「また聴きたいな、奏君のピアノ」

奏「……」

須直、奏の服のポケットに何かの感触を覚える。

須直「ちよつとごめんね」

須直が奏のポケットに手をつ突っ込むと、カセットプレイヤーが出てくる。

須直「聴いてもいい？」

奏「……」

須直、イヤフォンを耳にはめ、プレイ

ヤーの再生ボタンを押す。

須直「……これって」

奏「……」

○蓮司のアパート・リビング（夜）

ソファに横たわる奏を、蓮司が困惑した表情で見つめる。

須直、温かい紅茶を持ってくる。

須直「次の公演どうするの？」

蓮司「6日後に長野で演奏会があるけど……」

キャンセルするつもりはないよ」

須直「今は、無理させないほうがいいんじゃないかな」

蓮司「……でも、病気じゃないんだろ」

須直「お母さんが亡くなったこと、奏君はちゃんと理解してるんだよ」

蓮司「……だとしても、時間が解決するしかないだろ」

須直「僕たちならさ、たくさん話して、たくさん泣いて、たくさん笑って、そうやって過ごしているうちに時間が解決してくれるかもしれないよ。でも、奏君にはそれができない」

蓮司「……兄さんからピアノを奪ったら何も残らないだろ」

須直「この前蓮司は、お母さんは奏君の人生を生きてきたって言ったよね」

蓮司「ああ、言った」

須直「お母さんは、確かに奏くんの人生を生きてきた。でもだからって、奏君は自分の人生を生きてきたって本当に言える？」

蓮司「何が言いたいんだよ」

須直「……奏君は、お母さんのためにピアノを弾いていたかもしれない。奏君自身も、お母さんの人生を生きていたのかも……」

蓮司「……」  
須直「誰も、奏君の本当の気持ちは分からないんだよ」

須直は、服のポケットからカセットプレイヤーを取り出し、蓮司に渡す。

須直「これ」

蓮司「？ 兄さんのだろ」

須直「奏君は、ずっと蓮司の背中を追いかけていたんだと思うよ」

蓮司「え？」

須直「今日は帰るね」

須直は帰り支度をする、部屋から出て行く。

蓮司「……なんだよ、あいつ」

蓮司、カセットプレイヤーを見つめる。  
イヤフォンをはめて、再生を押す。  
軽快なピアノの音が聞こえてくる。

子供の蓮司が弾いている『英雄ポロネーズ』だ。

蓮司「……」

曲に合わせて口ずさむ奏の声。

凧沙の笑い声も聞こえてくる。

蓮司の、無邪気な演奏。

奏の、デタラメな鼻歌。

凧沙の声「奏、蓮司のピアノが好きなの？」

奏の声「はい、世界で一番、好きです」

かすかに聞こえてくる会話。

蓮司の演奏が終わる。

音源はそこで止まっていた。

蓮司「……」

蓮司はイヤフォンを外すと、ソファに

横たわる奏を見る。

蓮司「兄さん」

奏「……」

奏、うつすらと蓮司に反応する。

蓮司「今、何考えてる？」

奏「……」

蓮司「俺は……」

奏「……」

蓮司「本当は話したいことや、兄さんと語り

たいことがいっぱいある」

奏「……」

蓮司「兄さんも、そうなのか？」

○オフィス

職場の上司（56）に、頭を下げている蓮司。

上司「一週間も休むって……無理に決まっているだろ」

蓮司「おねがいします」

上司「お前の担当顧客はどうするんだ」

蓮司「数は説明して納得して頂きました。

急ぎの対応が必要な企業は、誰か他のメン

バーに引き継ぎます」

上司「他のメンバー？ 誰だよ」

蓮司「それはこれから……」

梨花、蓮司の横に立つ。

梨花「私、やりますよ」

上司「……」

梨花「いいじゃないですか。鳴宮君、有給も使わずに働き詰めだったんですし」

蓮司、再び頭を下げる。

蓮司「お願いします」

× × ×

蓮司、パソコンで引き継ぎ資料を作成している。

梨花、隣に立っている。

蓮司「ありがとう、助かった」

梨花「で、突然休暇を取った理由は何なのか

しら？」

蓮司「……兄と旅行をしたことがなかったな  
って思ってたさ」

梨花「あのお兄さん？」

○高速道路を走る車（朝）

快晴の空。

車を運転する、私服姿の蓮司。

助手席には奏。

奏は流れていく景色に興味津々だ。

カーラジオからは、軽快な音楽が流れている。

○サービスエリア

車の中にいる奏。

外で電話をしている蓮司。

蓮司「その件でしたら、パターン案を送っているので、先方に確認してもらって——」

奏、ドアを開けて、車から出る。

お店がある方へ、歩いて行く。

蓮司、それに気づき、電話をしながら奏を追いかける。

○同・店内

奏と蓮司、並んでうどんを食べている。

奏は親子丼もセットでつけている。

奏、丼の具の部分を器用にすくい取ると、フタに入れて蓮司に渡す。

蓮司「変な食べ方するなよ。親子丼って具が  
美味しいのに」

奏「……」

奏、気にせず食べつつける。



蓮司は仕方なく、親子丼の具だけを食べる。

× × ×  
食べ終わった奏。

そわそわし始めたかと思うと、テレビを探して歩き回る奏。

奏「10、9、8、7……」

蓮司「兄さん、これだろ」

蓮司、机にスマホを置くと、動画サイトにアップされている通販番組を流す。着席して、観始める奏。

奏はまた、司会者の台詞を真似してぶつぶつ喋っている。

蓮司「この番組の何が魅力なんだか……ちよっと待てよ」

蓮司、番組を見つめる。

紹介する商品が映し出されていく。

家電商品がメインのようだ。

蓮司「なるほど、家電は白いのか」

奏「家電は、白いです」

○走る車

蓮司と奏を乗せて、車が走る。

景色は徐々に、山々に囲まれていく。

【長野市】の道路案内標識。

○長野市のコンサートホール・ロビー

壁に大きく貼られているポスター。

『鳴宮奏 日本公演 2022』

それを見つめる蓮司。

奏は、関心を示していない。

蓮司「公演日まであと5日……とりあえず、

今日は下見だな」

奏「……」

蓮司「兄さん、そこ立って」

蓮司に促されるまま、ポスターの前に立つ奏。

蓮司、携帯で写真を撮る。

蓮司「写真より男前じゃん」

奏「男前です」

そんな二人を見ていた、江藤大志（3  
1）が近付いてくる。

江藤「……あの、もしかして鳴宮奏さんご本人ですか？」

蓮司「え？　そうですが」

江藤「やつぱり！　私、大ファンで……あ、いきなり声をかけてちゃってすみません」

蓮司「いえ、ありがとうございます」

江藤「あの、もし良ければ……」

江藤、鞆からパンフレットを2部取り出して、蓮司に渡す。

『昼のピアノコンサート　入場無料』  
と書かれている。

蓮司「これは？」

江藤「今日と明日の2日間、ここで開催している演奏会です。僕が企画してるんですが

……入場無料なので是非」

蓮司「ありがとうございます。……兄さん、観てく？」

奏「はい、観ます」

蓮司「じゃあせっかくなんで」

江藤「やった！」

江藤、嬉しそうに頷く。

○同・中ホール・客席

小さい子どもを連れた家族が多い。

コンサート会場とは思えないほど、騒がしく賑わっている。

奏、蓮司、その隣に江藤が座る。

蓮司「随分カジュアルなコンサートですね」

江藤「普段クラシックを聞かない人や、子どもが小さくて聞きに来るのが難しい人達に向けた、誰でも参加できる演奏会を定期的に開いているんです」

蓮司「そうなんですか」

江藤「もちろん、意図的にうるさくしては駄目ですが。でも、普通の演奏会よりも、その辺りが緩いんですよ」

蓮司「へえ……」

蓮司、周囲を見渡す。

赤ちゃんや、作業服の男性、学生同士など、色んな観客がいる。

蓮司「こうやって、ふらっと立ち寄れる演奏会もいいですね」

江藤「演奏者も、ほぼボランティアに近い形で出てくれています」

蓮司、パンフレットを見る。

ピアノリストたちの経歴は、皆なかなかのものだ。

○同・中ホール・舞台く客席（モンタージュ）

ピアノリストが、『子犬のワルツ』『トルコ行進曲』『ノクターン』など、有名曲を弾いていく。

× × ×

蓮司や奏、他の観客たちも、リラックスした雰囲気で、楽しそうに演奏を聴いている。

和やかな演奏会。

× × ×

最後は、2台のピアノで、4人のピアノリストが『天国と地獄』を連弾。

盛り上がる会場。

○同・中ホール・ロビー

江藤、蓮司と奏を見送る。

蓮司「ありがとうございます。兄も楽しんでいたようです」

江藤「あの…駄目元でのお願いなのですが」  
蓮司「はい？」

江藤「明日の演奏会、奏さんにサプライズで1曲弾いて頂けないでしょうか。もちろん、少ないですが出演料もお支払いします」

蓮司「…それはちよつと」

江藤「そうですね。世界的なピアノリストの奏さんに、大変失礼なお願いを…」

蓮司「いや、そうじゃないんです。実は今、兄はスランプ中で」

江藤「え？ そうなんですか？」

蓮司「ピアノに興味を持ってない状態が続いて

いて」

江藤「それは心配ですネ……」

蓮司「ゆっくりり様子を見ようとは思っているんですが」

江藤「また復活されると良いですね」

蓮司「ええ」

江藤、少し考えて、

江藤「……ちなみに、蓮司さんは？」

蓮司「俺ですか？ いや、俺は……」

江藤「言おうか迷ったんですが……実は僕、昔から蓮司さんを知っていて」

蓮司「え？」

江藤「僕が中学の頃ですかね、当時いくつかのコンクールで何度かお見かけして」

蓮司「そうだったんですか」

江藤「もの凄く上手い小学生がいるって、僕らの中で話題になって……それが蓮司さんでした」

蓮司「当時お会いしていたとは……。気が付かなくてすみません」

江藤「(笑って)まさか。僕が一方的に知っていただけです。今でもピアノを？」

蓮司「……まあ、趣味程度ですが」

江藤「でしたら是非。カジュアルな演奏会で、すし、普段弾き慣れている曲でも構いませぬので」

蓮司「……」

蓮司、奏を見る。

しばらく考え。

蓮司「……じゃあ、出ます」

江藤「本当ですか！ ありがとうございます。ちよつと運営に言ってきましたね。こちらでお待ちください」

江藤、嬉しそうに去って行く。

### ○道路（夜）

車を走らせる蓮司。

助手席で、奏が何かに反応する。

窓の外には、お城のようなラブホテルが見える。

奏、窓を叩き、「お城です」とテンションがあがる。

蓮司「あれは兄弟で行くようなところじゃないから」

奏「お城、行きたいです」

奏、暴れだす。

蓮司、しばらくほったらかしにしていて、奏は突然ドアを開けて、外に出ようとする。

蓮司「うわっ、何ドア開けてるんだよ！」

蓮司、慌てて車を脇に停める。

蓮司「危ないだろ！」

奏、シートベルトを外し、外に飛び出して行く。

蓮司「マジかよ」

蓮司も、飛び出して行く。

蓮司「待って！ 兄さん！ 分かったから！  
いつかい車に戻って！」

○ラブホテル・ロビー

蓮司と奏、部屋を選んでいる。

じろじろと兄弟を見る、受付スタッフ。

蓮司「……兄さん選んでいいよ」

奏、喜々として部屋を物色している。

『プリンセスルーム』を選択する奏。

奏「ここに、します」

蓮司「ああ……せっかかない旅館、予約したのに……」

○同・プリンセスルーム

ファンシーで、全体的にピンクがかった部屋。

天井にはシャンデリアもある。

奏、勢いよくベッドにダイブ。

花柄のシーツと不釣り合いな奏を見て、  
蓮司は笑ってしまう。

○同・洗面台

蓮司と奏、二人とも顔にシェービング  
クリームを塗っている。

蓮司「角度によっては切れやすいから、そつと、慎重に」

奏「慎重に」

蓮司が先に見本を見せ、奏がそれを真似しながら髭を剃っていく。

蓮司「そうそう、ゆっくり」

奏、髭を剃ることができた。

蓮司がガッツポーズを見せると、奏も真似をしてガッツポーズ。

○同・ベッド

ファンシーなダブルベッドで、兄弟が並んで眠っている。

奏が寝返りをうって伸ばした手が、蓮司の顔に直撃する。

蓮司、一瞬顔を歪めるが、起きないまま寝返りをうつ。

○走る車（朝）

朝の長野の街並み。

空気が澄んでいて、気持ちよい。

運転する蓮司の顔は、右の頬が少しだけ腫れている。

蓮司、備え付けのミラーで顔の腫れをチェックしている。

蓮司「いつ付いたんだ……」

奏、蓮司に構わず、景色を楽しんでいる。

○コンサートホール・控え室

カジュアルなスーツに着替えた蓮司。

まだ顔の腫れを引きずっており、鏡でチェックしている。

蓮司「……気になるな」

扉を叩く音がして、江藤が入って来る。

江藤「蓮司さん、そろそろ」

蓮司「はい。あの……スーツありがとうございます  
いました。サイズもぴったりで」

江藤「似合ってますよ。……じゃあ、僕は客席で、奏さんと演奏を聞いてますね」

去ろうとする江藤を、「あの」と蓮司が引き留める。

江藤「？」

蓮司「この腫れ、気になりますか？」

江藤は笑って、

江藤「奏さんと喧嘩でもしたんですか？ 大丈夫。

夫。客席からは見えませんよ」

蓮司「そうですか」

江藤「演奏、楽しみにしてます」

江藤、部屋を出ていく。

蓮司、ふと自分の手を見つめる。

手が震えていることに気付く。

○同・中ホール・客席く舞台

江藤と奏、並んで座っている。

奏は落ち着きなく、周りをきよろきよろ見回している。

江藤「次は蓮司さんの演奏ですよ」

奏「蓮司、ピアノ弾きますか」

江藤「はい、楽しみです」

奏「楽しみです」

拍手と共に、蓮司が舞台袖からやって来る。

奏「蓮司です！」

蓮司、ゆっくりとお辞儀する。

そして着席する。

奏「……」

奏、蓮司をまっすぐ見つめる。

蓮司は深呼吸すると、ショパンの『英雄ポロネーズ』を弾き始めた。

その瞬間……。

奏、立ち上がる。

江藤「え、奏さん」

奏「ああああ」

奏、席を離れて、舞台に向かって歩いていく。

江藤「え、奏さん！？」

それを見た子供たちは面白がり、奏の後をついていく。  
蓮司の演奏は続く。

奏、舞台の前に立つと、誰よりも近くで蓮司の演奏を聞いている。奏、小さく身体を揺らし、口ずさむ。奏の指が動いている。

蓮司「……」

蓮司、ちらと奏を見る。

目の前にいることに若干驚きつつ、蓮司は少しだけ笑う。

再び蓮司はピアノに向き直り、演奏を続ける。

演奏が終わると、拍手が起きる。

蓮司が立ち上がる。

奏も拍手を送る。

蓮司、目の前に立つ奏を見て笑う。

蓮司「なんでここで見てるんだよ」

奏「……」

蓮司、奏に向かって、お辞儀をしてみせる。

奏、たどたどしく、ガッツポーズする。

○同・大ホール・観客席

T「4日後」

2千人近い観客が入っている。

皆手には、『鳴宮奏 日本公演』のパンフレット。

蓮司「……」

蓮司、心配そうな表情を浮かべている。横から手が伸び、蓮司の手を握る。

蓮司が振り向くと、須直が笑いかける。

須直「奏君なら、大丈夫だよ」

蓮司「そうだな」

蓮司、舞台に向き直る。

○同・大ホール・舞台袖

楽団員たちが舞台へ出ていく。

指揮者、奏と握手をする。

奏、少しびくっとする。

指揮者「素敵な時間にしましょう、奏くん」

奏「……はい」

指揮者は、先に舞台へ。



奏、ゆつくりと後に続く。

○同・大ホール・観客席く舞台

蓮司が緊張した表情で見守る中、奏が舞台袖から登場する。  
湧き上がる拍手。

奏は、行ったり来たり、いつもの動きを数度繰り返し、着席する。  
拍手が鳴り止む。

奏「……」

奏は、なかなか弾こうとしない。

緊張感が会場を包む。

蓮司「……頑張れ、兄さん」

奏「……（深呼吸）」

奏、突然両手を高く振り上げたかと思ふと、鍵盤に指を叩き付けるように音を鳴らし始める。

会場の空気が、一瞬で変わる。

奏の音が会場に満ちていく。

風沙M「大丈夫。あとは……」

蓮司M「……あとは、奏の音に、身を任せるだけ」

舞台では、水を得た魚のように、喜々としてピアノを弾く奏がいた。

○同・ロビー

観客達は、コーヒーやワインを飲んだり、思い思いに休憩をとっている。

蓮司、宮沢を発見する。

蓮司「宮沢先生！」

蓮司、宮沢のもとへ駆け寄っていく。

宮沢「また会いましたね」

蓮司「先生は奏の追っかけなんですか？」。

宮沢「いいえ。僕は鳴宮兄弟のファンなんですよ」

蓮司「はは……」

宮沢「奏くんの演奏、ちょっとだけ変わりましたね」

蓮司「はい」

宮沢「少し蓮司君っぽさがあった。人間臭い

「……あ、先生」

蓮司「……あの、先生」

宮沢「なんですか？」

蓮司「もう一度、俺にピアノを教えてくださいませんか」

宮沢「え？」

宮沢、驚いた表情を見せる。

蓮司「甘い世界じゃないのは分かっています。

年齢的に遅すぎることも。……ただ、もう

一度ちゃんと音楽に向き合いたいです」

宮沢「人生に、遅いも早いもありませんよ」

蓮司「……はい」

宮沢「ふふふ」

蓮司「？」

宮沢「きつと君もすぐ、僕の手を離れていきますよ。というより、離れてもらわないと困ります」

蓮司「(嬉しそうに) はい」

○同・大ホール・観客席く舞台

席に戻ってくる蓮司。

蓮司の顔を見た須直、顔をしかめる。

須直「何、ニヤニヤして。いい男でも見つけた？」

蓮司「いや」

蓮司は、宝物を見つけた少年のように、無邪気な笑みを見せる。

蓮司「もつと、いいもんだよ」

須直「？」

開始のブザーが鳴る。

舞台には一台のグランドピアノ。

拍手とともに、奏が舞台に現れる。

蓮司、誇らしげな表情。

再び会場が奏の音に包まれていき……。

○新宿駅・ホーム

電車を待つ乗客で溢れかえっている。

須直(29)、イライラしながら何度も

電光掲示板を確認する。

須直「ちよつと、嘘だろ！」

掲示板には、遅延のお知らせが表示されている。

須直「今日に限って……遅延なんてやめてくれよ！」

T「二年後」

○ゲイバー・カウンター

昼から飲んでいる客たち。

前園（47）は、カウンターで接客をしている。

客1「ねえママ、そこに飾ってあるポスターのイケメン誰なのよ」

客2「クラシックって、ママにそんな高尚な趣味ないでしょ！」

ぎやはははと笑う客たち。

壁には、蓮司のピアノリサイタルのポスターが飾られている。

前園「……彼は、私が唯一愛した男よ」

客たち「ギャー！！熱いわー！！」

騒ぎ立てる客たち。

○コンサートホール・ロビー

須直は駆け込んで来ると、会場の扉を開けようとして、係員に止められる。

係員「お客様、演奏が始まっておりますので、我々のご案内します」

須直「分かりました……」

須直、そわそわしながら、係員の後についていく。

○同・大ホール・観客席／舞台

係員に連れられて、入ってくる須直。ピアノの音が聞こえてくる。

須直「……」

須直、立ち止まる。

そして、舞台を見つめる。

舞台には、ピアノを弾く蓮司の姿があった。

係員「お客様？」

須直「……」

須直、感極まり、動けない。

× × ×

一曲目が終わり、拍手を送る観客。  
蓮司は、舞台袖に戻っていく。

○同・大ホール・舞台袖

戻ってきた蓮司。

待機していた、奏に声をかける。

蓮司「兄さん、準備はいい？」

奏「……」

蓮司、奏に手を差し伸べる。

奏、その手を掴む。

○同・大ホール・観客席く舞台

須直、パンフレットを見る。

『鳴宮兄弟による英雄ポロネーズ編曲』  
と書かれている。

大きな拍手が湧き起こり、須直はパン  
フレットから舞台に視線を戻す。

須直「……蓮司」

蓮司が登場する。

少しして、奏も登場してくる。

拍手がより一層大きくなる。

須直「……」

須直、嬉しそうに舞台を見つめる。

着席する蓮司。

奏が舞台に出たり入ったりするのを、

じつと待っている。

奏が座ると、蓮司は頷く。

蓮司、奏、同時に手を振り上げる。

兄弟の演奏が始まる――。

○同・大ホール・舞台

息ぴったりに、演奏は進んでいく。

兄弟のピアノは、まるでオーケストラ  
の音色のように、たくさんの音の粒と  
ともに響き渡る。

蓮司「……」

蓮司、奏を見る。

奏は演奏に夢中で、目は合わない。

× × ×

(フラッシュ)

子供の頃のふたり。

蓮司がピアノを弾く横で、奏が鍵盤に手を触れて、音の振動を楽しんでいる。

× × ×

蓮司、ふっと笑うと、奏から視線を外してピアノに向き合う。

奏の音に追いつこうと、蓮司は必死に食らいついていく。

蓮司の音が、強くなっていく。

自分の演奏に没入していた奏は、一瞬顔をあげて、蓮司を見る。

奏「……」

奏の視線先の蓮司は、ピアノに向き合っていた。

視線は合わない。

奏、再びピアノに向きあう。

兄弟の視線は交わうことはない。

しかし、音楽で心を共有するふたり。

ふたりの演奏は、会場を熱気に包み込んでいく。

蓮司M「……そして今日俺は、今までで一番

兄を近く感じたんだ」

タイトル「奏でて」

(完)